

解題

*

*

*

石井 登

カルロス・フエンテスが死去して、はや二年が過ぎようとしている。二〇一二年五月一日のその死を悼み、各国の新聞から計報記事が出された。わが国でも、野谷文昭氏（朝日）、寺尾隆吉氏（毎日）、星野智幸氏（読売）らが新聞各紙に追悼記事を掲載している。葬儀は国葬となり、メキシコ市の国立芸術院にて執り行われ、遺体はパリのモンパルナス墓地に埋葬された。フランスの著名人の他、旧友のフリオ・コルタサル、そして、息子のカルロス・ラファエルと共に、かつての住まいであったパリに眠っている。

九〇年代以降、わが国におけるフエンテスの作品の紹介は滞っていたが、彼自身は旺盛な執筆活動を続けてきた。今世紀に入ってから没後出版された『バルコニーのフリードリッヒ』（二〇一二未訳）など七冊の新作小説を発表しており、決して彼自身が停滞していたわけではなかった。近年、寺尾氏の訳による『澄みわたる大地』や八重樫克彦・八重樫由貴子両氏による『誕生日』など、五〇年代・六〇年代の作品も出版され、フエンテスの作品の紹介も長いブランクを経て、ようやく再スタートを切ったと言えるだろう。しかし、この二作品はフエンテスの執筆活動の初期におけるもので、ヘメキシコ性の探求という、オクタビオ・パスを引き継ぐメキシコ文学のテーマが中心となっており、彼の代表作である『我らの大地』（一九七五未訳）以降のフエンテスの作品傾向とは、いくらか異なっているように訳者には思われる。今後、フエンテスの文学の全貌を明らかにしていく作業がおこなわれていくことを期待したい。

本作「二つのアメリカ」は、『オレンジの樹、あるいは時の円環』と題され、一九九三年に発表された短篇集の最後に収録された作品である。時代は北米自由貿易協定（NAFTA）調印後の緊迫した状況の中にあつた。その発効とともに起こったサパティスタ民族軍の蜂起などは良く知られるところだろう。フエンテスには彼らへの支持を表明したが、本作はNAFTAの背景にある新自由主義に対する彼の立場を示したものと捉えることができよう。作品中にはノムラ氏が率いる日本人部隊が登場する。彼らは国際協定を建てに、パラダイスであるアンティリア（アンティリーヤのもじり）へと乗り込み、その地を世界の一大リゾート地へと変えてしまふ。奇妙な日本人たち

の姿は、われわれ日本人から見れば失笑ものであるものの、この日本人たちが本場の日本人ではないことは、チリの社会学者マルティン・ホーベンハイムも指摘する通りである。ここで描かれる滑稽な日本人の姿は、むしろ新自由主義に組み入る人々、延いてはそれを推進する米国へと向けられたものと考えるのが妥当であろう。また、これは「二つのアメリカ」というタイトルが示す意味を知るヒントになるかもしれない。

主人公のクリストバル・コロンは、言うまでもなく新大陸「発見」者、クリストファー・コロンブスであるが、フエンテスが本作を脱稿したのは一九九二年一月で、セビリア万博、バルセロナ五輪など新大陸「発見」五百年を記念した様々な催しが行われていた時期に当たる。その意味ではタイムリーな人物を主人公とした作品でもある。歴史上の人物を扱う歴史小説という点、歴史解釈の現実性が問われることが少なくないが、本作ではそのような視点は度外視されてしまっている。背景には例えば歴史学者エドモンド・オゴルマンの『アメリカは発明された』やツヴェタン・トドロフの『他者の記号学』で指摘されるような、コロン自身が行ったとされる出資者へ向けた「捏造」であろう。コロンが自らの嘘について告白する場面が見られるのはこのためである。

魔術的リアリズムについての研究を行った米国の文学研究者シーモア・メントンは、『新しい歴史小説』という、ラテンアメリカ文学の新たなジャンルを示した。彼はフエンテスの作品については『我らの大地』、『古いぼれグリゴ』(一九八五)安藤哲行訳(一九九〇)、『闘い』(一九九〇未訳)をこのジャンルの作品であると指摘している。本作もまた、この「新しい歴史小説」というジャンルの小説であると言えるだろう。メントンはその定義として歴史上の人物を用い、時代錯誤やメタフィクションを用いた手法で描かれるものなどを挙げている。コロンやピソ兄弟など歴史上の人物を用いながらも、その人生はわれわれの知る歴史とは異なっている。五百年生き続けるコロンが飛行機で現れる日本人と遭遇する本作では、時間の感覚がSF的で、現実にはあり得ないフィクションの典型となっている。ヴァージニア・ウルフの『オーランド』のごとく、主人公は時代を越える。また、奴隷貿易に従事するコロン、ポルトガルのセバスチャンの話題など、細部についても齟齬が見え隠れしている。形式としては日記の断片という形を取りながら、読者を想定した矛盾を内包するものとなっており、メタフィクションの手法を用いたポストモダンの小説と呼べるだろう。

コロンがその出自について自分をユダヤ人であると告白する部分があるが、恐らく歴史学者サルバドル・デ・マダリアガの説を参照しているものと思われる。マダリアガは、イタリアに暮らしながらイタリア語は上手でなく、スペイン語を用いていたコロン一家を「ジェノバに移住したスペイン系ユダヤ人であり、この民族の伝統に従い、出身国の言語を忠実に守りつづけたのである」と指摘している。フエンテスはこの説に共感を覚え、コロンをスペインからの亡命ユダヤ人と位置付けたのであろう。ディアスポラに代表されるように歴史上の出来事を人の移動から捉え、その都度起こる『相互の出会い』に歴史のダイナミズムを見出し、それを小説のテーマに据えている。こ

ここに、同時期に出版された歴史評論『埋められた鏡』にも共通する、メキシコ性の探求というテーマを越えた、新・旧大陸の出会いを俯瞰的に見つめる世界文学としてのフエンテスの姿を見出せるのではないだろうか。

最後に、この「二つのアメリカ」以前のゴンブラスを主人公とした小説として、アレホ・カルベンティエルの『ハーブと影』、アベル・ボッセの『楽園の犬』などが出版されていることを紹介しておきたい。いずれも新歴史小説として大変面白いが、本作と読み比べてみることをお勧めする。ラテンアメリカ文学の《ブーム》以降も、興味深い小説が数多く世に出てきていたことが再認識できるはずである。

この短篇はメキシコの作家、カルロス・フエンテスの短篇集『オレンジの樹 あるいは時の円環』（Carlos Fuentes *El naranjo, o los ciruelos del tiempo*, 1993）後に『オレンジの樹』(*El naranjo* に改題)に収録された「二つのアメリカ」"Las dos Américas"の全訳である。底本には Aliaguara 社の初版を使用し、他に改題後の11版、及び Farrar, Straus & Giroux 社の Alfred Mac Adam による英訳本を参照した。

謝辞

本作の翻訳は二〇〇六年のメキシコ大学院大学留学期に行ったものが、その元になっている。滞在中、ご自宅を提供して下さったメキシコ大学院大学教授の田中道子先生、英訳では全く違う表現になっているようなわかりにくい部分について説明して下さった古書店「ラ・レアリダー」のルイス・ガスバルさんとダニエル・ケイトさんへ。その後、立教大学ラテンアメリカ研究所のラテンアメリカ文学の授業でこの作品を扱った際に、共に訳文についての検討を行って下さった熊川玲子さん、高安宏治さん、内木誠さん、石倉道武さん、遠藤直美さん、葛巻匡子さん、秋田敬子さんへ。本作を発表する機会を与えて下さった東京大学現代文芸論研究室准教授の柳原孝敦先生と『神奈川大学評論』の村井丈美さんへ。そして、訳文についてのほか、数限りないご指導を賜りました東京大学名誉教授の野谷文昭先生へ、この場を借りて御礼申し上げます。